

あを 5

2201



寄稿

亀田虎童子

荀も竹もまつ直ぐ裏の山
大木は揺れもどすなり青嵐
みじかくも長くもなれまくわ瓜
雄叫びもなく日の暮れし蟻地獄
ピーマンの中の空気は膨れをり

『暖流』『二土の会』より・文責・佐藤喜孝

五月集

ほぐれんと

佐藤 竹僊

眼前を大いなる秋過りゆく

今朝の豫報の雪がちらつく春隣

老の春日の出前から腹が空き

傘壽すぎ日の入前の露の味噌

紅梅へほぐれんとする辛夷かな

梅の花鳩の背中がかゆいらし

ミサイルの痕を啄む春の鳩

花屑の噴き昇りたり戦とは

下校児ひとりおほあらせいとうのほとりゆく



雑詠

森なほ子

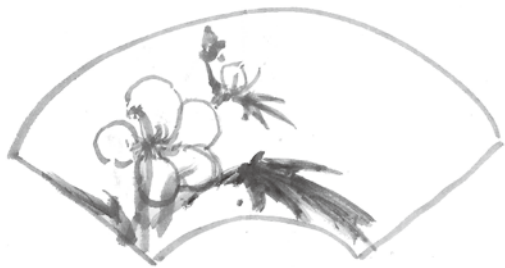
日陰りてたちまち居間のうそ寒し
節分の一句得ざるは鬼のせひ
隣家より偏屈爺の「鬼は外」
明日よりは春の鳥なり寒鳥
立春や鶉の啄む昨夜の豆
千の蕾咲かせてみたしブロッコリー
バレンタインデー引いて馬鈴薯古歳時記



美術展

赤座典子

春色のよそゆき探す彼岸かな
六本木並木の桜色薄く
ニューヨークからの六十五点うららけし
陽炎や花札のやうゴッホの庭
暖かや好きなカラーに並び居て



春なのに：

秋川 泉

庭角にぽっかりぷっくり露の臺
ウクライナは戦争の日々露の臺
轟るやウクライナには弾が降る
雨ごとにずんずん伸びるチューリップ
パンジーとビオラの競ふプランタン
朝の雨琴弾き鳥を夢うつつ
明け方に鳴き交しをり河原鶉
春の鴝ぴたりと二羽の寄りそへり



藤穂さん

七郎衛門吉保

山笑ひ転居を決めし藤穂さん
所替へせずに旅立つ遍路道
句帖には田も穂もありて藤の花
藤穂さん上寿成就し花万朶
四月より主人不在の暦かな
卒園し芽出し忙し孫娘
卒園よあたしやっぱしあのこすき
被災地といふ名の春の十一回



嗚呼

篠田純子

藤穂さんへ献盃そして花菜飯
この世から手離す悔いや花の冷
藤穂さんロス田端に桜花しまきけり
「彼岸に逝くは天寿まつたう」言ひあへり
草の花七十余名の志願兵
泣き黒子^{ぼくろ}須可^{とつちまを}取焉乎下萌ゆる



桜のワルツ

篠田大佳

夜の雨を花卉に受けて庭椿
飢餓の春母屋に満ちてワルツかな
花あれば昼餉の味の鮮やかに
別宅の庭を桜のワルツかな
地平線へ汽車は進めり春の水



三月尽

須賀敏子

さくら咲くすべて許してしまひさう
六地藏並ぶ寺院や花辛夷
たんぽぽや定刻過ぎのバスを待つ
作り手のちらしと共に土佐文旦
はつきりと書かれし浅蜷中国産
お彼岸に割ってしまったマグカップ
レシートを挟む日記や三月尽
俳人も歌人も反戦董濃し



ホーム入居

田中藤穂

紅椿七十余年住みし家
父母をりし生家なつかし桐の花
蔦芽吹くホーム入居の日の近し
桜の芽ほのと別れの時迫る
子らの近きホームを選び蔦芽吹く



春

長崎桂子

春光の東から西向ひ風
春夕焼思ひ出す事多多ありし
今朝晴るる遅れし水仙の開花
気温上昇早早花の盛りかな
搔き曇り髪逆しまに春一番
子雀の遊ぶ庭先集合住宅
春野菜存分に煮る記念の日
芽吹して庭に賑はひ戻りけり

三月（四月号補遺）

森なほ子

水揺らし発つ日の近き鴨の列
鴨去って烏なにやら静かなり
御堂三つ仏九体百千鳥
よく吠えし犬もうをらず春の垣
春の雨まだとりどりに供花の色
抽斗に古鍵いくつ冴え返る
風折れの松束ねあり春彼岸
目覚むれば戦火の国在り春の朝



友老いていつか茸の目利きなる



亀田虎童子

川上より流れてきたる春の水

佐藤 竹僊

残る雪鈴鹿連峰縞模様

長崎 桂子

氷上の石の行く末朧にて

赤座 典子

涅槃図の獅子は腹出し嘆きをり

秋川 泉

誰が止めるプーチン暴走利休の忌

七郎衛門吉保

日の梅や日影の蕾たづさへて

篠田 純子

木の芽どき物狂ひせる大統領

篠田 大佳

薄氷やまなこにひかり入るけふぞ

須賀敏子

金柑の色濃くなって鵜の影

須賀敏子

ブロッコリー乗せるシチューの中心に

須賀敏子



大勢で大声で鍋かこみたし

田中藤穂

駐車場見慣れぬ猫の日向ぼこ

須賀敏子

冴返る交通整理の重装備

長崎 桂子

ホラ吹きといふ語廃れて四月馬鹿

森 なほ子

理不尽な露の侵攻や利休の忌

赤座 典子

繭玉やカリンバの音やさしかり

秋川 泉

シヨパン「雨だれ」に似た音雪雫

七郎衛門吉保

首都東京キッチンカーのうららけし

篠田大佳

白梅や散歩の仮の目的地

須賀敏子

日脚伸び戦始める男あり

須賀敏子

椋鳥の一羽の去らぬ日暮れかな

田中藤穂

喜孝抄



友老いていつか茸の目利きなる

亀田虎童子

『あを』にご寄稿を掲載できたことに驚いてゐる。これは虎童子さんの長命が齎してくれた果実と思ひありがたく鑑賞させていただく。

友も我も共に老いた。ここに至るまで人生を研鑽に研鑽を積んできた。その結果、友は茸の目利きになったと。茸の目利きが実利に成るのか成らぬのかは知らぬが、研鑽の結実が「茸の目利き」とは。毒を見分ける術を体得毒は人生尾調味料ともなるか。誹諧味横溢の作品と讃嘆、見事な枯れやうである。(喜孝)

喧嘩相手欲しくなりたる寒さかな

亀田虎童子

「あを」へのご挨拶句と鑑賞いたしました。掲句に、一瞬緊張感が走りました。虎童子先生、ようこそ「あを」へ。どうぞよろしくお願いいたします。(純子)

老い止めの薬のありや初薬師

亀田虎童子

田中藤穂さんが、近所の医院に通っていらして、「先生、惚けに効く薬ありますか？」とお聞き

になったら「無い事もないですよ」と、先生は処方して下さったと聞きました。薬名から調べましたら、脳の血流を良くするという効能でした。(純子)

干鰯裂く思ひ出二つ三つ四つ

亀田虎童子

味覚を通じて思ひ出が一つ繋がり、また一つ繋がりして、作者は豊かな記憶の海を潜っていきます。干鰯から辿る記憶は酒席の思い出でしょうか。(大佳)

剥く前のてのひらの柿山の冷

佐藤竹僊

手のひらの上の、近くの柿から、遠くの山の冷に思いが飛んでいます。「剥く」と言う作者の行為の直前の、刹那の感覚です。(純子)

凍蝶のうす目あけたるやうな午后

佐藤竹僊

「胡蝶の夢」という故事があります。夢を見ているときに夢の中の蝶が自分なのか、自分か蝶なのかはつきりしないことから、夢と現実の境が曖昧になる状態を言うそうです。暖かさに覚醒しつつある凍蝶は作者か蝶か、主体があやふやになるような読みを試みました。(大佳)

冷蔵庫に食料いっぱいお正月

田中藤穂

お正月はめでたい日であると同時に、サービス業がことごとくお休みをする日でもあります。なんとか正月を乗り切るぞという作者の決意を読みます。(大佳)

年重ね 吾が郷の海初景色 長崎桂子

ふるさとは表面的には変わり映えないところではありますが、深いところでは、何かしら変化しているように思います。海の景が複雑な変化を想像させます。(大佳)

隣家より偏屈爺の「鬼は外」 森なほ子

偏屈なお爺さんが素直に年中行事をこなすのも可笑しみがあります。このお爺さんから鬼が出ていかないかという作者の願いも込められているようです。(大佳)

新玉の祝詞 LINE で次々と 赤座典子

インターネット技術が年賀状の代わりとなつて久しいです。Eメールがひと段落して、LINEが今の主流です。使い慣れてくるとメールより手軽にやりとりができて、挨拶もスピーディーです。(大佳)

小さくて皿にのりさう寒の月 秋川 泉

作者は月を食べ物に見立てています。小さくて丸い食べ物は、マシユマロや月見団子のような形を想像してしまいます。小腹が空いたときに涎が少し出そうになります。(大佳)

大酒を飲んだ友去る晦日かな 大日向幸江

日記のような連作で、このご友人は喪中だそうです。そうすると、ハレの日も普通の一日にしかならず、暇を持て余して遊びに来たという印象です。酒の席で会話が弾んだことを想像します。(大佳)

咳一つ図書館の席一人置き 七郎衛門吉保

咳ひとつでも、敏感に反応してしまう昨今です。咳の声にふと周りを見渡すと、距離が置かれているという句意と読みますが、「せきひとつ」と「せきひとり」のリフレインも楽しいです。(大佳)

初烏わつはあはあと銀座路地 篠田純子

正月の残飯が豊富で、糖分かアルコールで気分がハイになった烏が変な声を出したのでしょうか。人間の食事も豪華になる正月は、烏にしてみてもめでたい一日だったかもしれません。(大佳)

初詣口開け見入るマルベル堂 篠田純子

初詣は浅草寺。マルベル堂は日本でただ一軒浅草にあるプロマイド屋さん。マルベル堂を口を開けて見入ってゐるわけではない。往年のスターたちのプロマイドがびっしりと店内を覆ひ、足りなくて道にあふれ出してゐる間口一軒のお店。一枚一枚のプロマイドを忘我と見てゐるおのれにふと

気づいた。自分が口を開けて見入る姿は気づくにくいもの。他のお客さんかもしれないがやはり自画像の方が面白い。(喜孝)

降る雪や銜学の士の独りごち

篠田大佳

自嘲の句なのか、批判の句なのかは不明です。「降る雪や明治は遠くなりにはけり」を連想しました。「や」「かな」「けり」の切れ字についての、重複はどうなのか？の問いに、銜学の士は、「いやいや、名人上手ならば大丈夫」と涼しい顔をしています。(純子)

駐車場見慣れぬ猫の日向ぼこ

須賀敏子

縄張りを争った猫の姿が浮かびます。争いに勝利した猫が、のんびりと日向ぼっこをしています。争いと平和が一句の中で思い浮かべれます。どうやら、この猫は新参者のようです。(大佳)

汽車往くや孤独の人は雪を見る

篠田大佳

汽車といへば一時代前の雰囲気。去って往く汽車は夜汽車がいい。赤い尾灯が二つ、だんだん遠ざかり降る雪に紛れてそして見えなくなつた。見送つて討たのだらうか。プラットホームの端に佇む男。取り残された人を勝手な鑑賞をした。第三者のやうな書きぶりだがさうではないのであらう。(喜孝)



佐藤喜孝

森なほ子

立春やワクチンを待つ群静か
先づ木々の梢鳴らして風二月

○確かにさうだ。コロナ以前であつたら待合室のやうな不特定多数の人が集まると私のやうな者にもなにかと話し掛けてくる人がゐたものだ。ところがマスクをして間隔をあけての状況ではおしゃべりは先づ無理。身近な情報の交換もままならぬこととなつた。この句を懐かしく読み反す日がつ来るのであらうか。

○二月に入るとすぐに立春、春が来る。待つてましたと梅の花の開花を知らせるニュースが流れる。落葉樹の二月の梢のさまは細い枝先が天に向かって広がってゐるだけに見える。感覚の鋭い俳人はそのやうな光景にも春の魁を覚える。春信の気配を感じ取られた作品。

赤座典子

串カツ屋が選挙事務所の桜時
戦況の裏面の誘ふ桜狩

○選挙は衆智をあつめ次の世の政治を定める大切なもの。そのような前向きな選挙の様子がこの句にある。選挙の必勝アイテムのひとつにカツ丼がある？。そのカツ丼をなりはひとする串カツ屋さんが選挙事務所と面白い。身近な地方選挙かもしれない。典子さんには珍しく軽口な俳句である。○戦況の裏面とは考えさせられた。表面はニュースで知ることのできる戦況のことであろう。ニュースなどで知らされてゐない戦況をおもんばかりのことを裏面と詠んだのだろう。その戦況の裏面、ある意味で本当の戦争の姿が桜狩に誘ふといふ。このところが典子さんの思ひまでに私の考えが至らないことにもどかしさを覚えた。

秋川 泉

春雨や引越すひとにあたたく
花の雨小走りに行くヨガレッスン

○春雨が引つ越しをする人を暖かく包んでくれてゐる。引つ越して行く人との別れでもある。別れといつても永遠の別れとは違ふのだが一抹の寂しさを覚えたのであろう。引つ越して行った先での安寧を願ふ句である。

○明るくそして明快な俳句。時間に遅れさうなのか、傘がなかったので小走りに花の雨の中を突っ切って行く。「小走りに行く」がこの句を躍動感のある句にしてゐる。

七郎衛門吉保

春愁ふロシア・コロナの上下動
露国にも咲いて欲しけりヒヤシンス

○「ロシア・コロナの」ロシアはロシアのウクライナ侵攻事変のことを指してゐるのだらう。コロナ騒動にしてもこの春の憂ひ事だと詠まれてゐる。しかし「上下動」が私には不明であった。状況に一喜一憂されてゐる状態なのであらうか。

○露国にも咲いて欲しいヒヤシンスだと吉保さんは詠む。なぜヒヤシンスの花なのだらうと、手がかりを探したヒヤシンスを花言葉に求めた。花の色によってそれぞれ花言葉が違ふと。すべての色に通じるのが「悲しみを超えた愛」そして紫のヒヤシンスは「ごめんなさい」とあった。句解きは

ともかく大国ロシアは花を愛でる国であってほしい。「欲しけり」は「欲しかり」か。または口語の方がふさはしいかも。

篠田 大佳

春休令和の子らは芝にあそぶ

鞆のまだ揺れ残る夜六時

○昭和の子でクリックすると、戦中戦後の子供たちの写真がまづ出てくる。私が写っていても不思議ではないモノクロ写真ばかりが並んでゐる。「昭和の子」はひとつのイメージでまとめられてゐるやうだ。「平成の子」では全くてんでんばらばらでこれといったまとまりがない。「令和の子」も平成の子と似たり寄ったりである。平成令和はまだ歴史にはなつてはゐず、昭和はまさにで遠くなりにけりだと改めて思ひ知らされた。若い大佳君にしても令和の子の環境は全く様変わりしてゐるといふ。

昨年一年余かけて再建になつた中野の小学校の話。出来上がったその小学校の変り様には蹤いていけなかった。二宮尊徳さんはどこかへ持ち去られて跡形もない。校門の脇の梅檀の木もない。尊徳さんに蔭を作つてゐたイチヨウなどの樹木もみな消えてしまった。古いものは綺麗さっぱり捨て

去つてしまった。そして校庭には人工芝の鮮やかな緑が敷き詰められてあつた。掲句の公園の芝生は人工芝ではない。

○ちよつと前まで誰かが使つてゐたのだろう。五月ごろの十八時はまだ明かるいが、春先の六時は夕方といふより夜の暗さだといふ。この誰もゐないのにブランコが揺れてゐることに私を含め俳人は興味を抱く。「鞆のまだ揺れ残る」に時間を夜の公園と定めたところに他の句と違ふもう一つの世界を描けた。

ぶらんこの揺れを残して誰もゐず 鶴岡 加苗 (狩)

ぶらんこの揺れの残れり宵の庭 山莊 慶子 (あを)

鞆やだれもいぬのに揺れてをり 後藤 マツエ (槐)

須賀 敏子

この空の続きに戦春悼む

椿咲く「松元ヒロ」のソロライブ

○まさに敏子さんの詠まれたやうに地球の空は一つしかない。世界は同じ空の下に暮らしてゐる。

生命の燃え盛る春なのにと作者は嘆く。

○残念ながら松元ヒロを知らない。ので調べると一九五〇年生まれのピン芸人と知る。敏子さんは松元ヒロのファンなのであらう。楽しみにソロライブに出かけた。初めから終りまで松元ヒロ一人の芸。十分に楽しまれた満足感が「椿咲く」で伝はった。

私の視野が、世界が十分狭いことを自覚し、自覚させられてゐる昨今。「はしたて集」でもわからぬこと知らぬことに出会ふこと再三再四である。

長崎 桂子

気象激し 黄水仙 開花に 嬉嬉
戦争の終結切に 願ふ 彼岸

○「気象」は大気の状態をいふ。気温・風力・雨量など大気中に起きる現象のことである。で「気象激し」だけでは何が激しいのかが分かりにくい。確かなことはわからないが桂子さんの言はうとすることはわかる。「嬉嬉」とは、少女のやうである。

○お彼岸はご先祖様をお祀りする習わし。つまり命を大切にすることを思ふ一週間である。桂子さんの思ひが一日も早く叶ふことを私も願つてゐる。

私の名前

秋川 泉

「お前の名前は、お大師様の御名『遍照金剛』（弘法大師空海）から頂いた名前なのだよ。ありがたく大切にしなければならぬよ」と、父から云われて育った。

名前と云うものは親の大きな思いがあるのだと思つている。私の本名は照子と申します。

高校時代の私の英語の家庭教師の名前は『苦住』先生と云う。生まれたての赤ちゃんに、「苦しみが住む」と名付けるのはとても勇気がいると思つた。先生の父上は人生には苦しみが必ずある。そのどんな苦しみがやってきても決して負けない。」と言つ意味で名付けられたと伺つた。

名前

「きなこ」と「ポンス」

須賀敏子

猫好きの私の処へ毎年娘婿より、日めくりの猫のカレンダーが届く。

猫の名前で多いのはやはり食べ物名だ。娘の家の二匹の猫は「きなこ」と「ポンス」である。

難読

篠田大佳

下の名前が難読で、学生時代はよく「だいすけ」と間違えられました。シンプルな名前の人が複雑な名前に憧れを抱くことの反対に、難しい名前を持つと、シンプルな名前に憧れがあります。

ママ

天高しノルウェー大使館にママチャリ
秋の昼ママ元気でと逝った夫
えいママよ西瓜丸ごと買つちまを
ママママとパパは泣かるる小正月
ママちやりの空気上々秋日和
龍の玉摘んでとことこママにハイ
メダル獲るママアスリートに春動く
パパママも時間区切らる卒園式

ママレード

ママレード煮る香広がり春を呼ぶ
永き日や少し苦めにママレード
ゴロゴロと届く甘夏ママレード
夏浅し今日の日付のママレード
秋しぐれ紅茶に溶かすママレード
梅雨の入りトロトロとママレード
母の日やママレードができました
ママレードの甘さ控え目夏初め
早々と梅雨入りの日のママレード
梅柑はママレードに朝の卓

ままごと

ままごとのごはんが光る猫柳

佐藤 喜孝
鈴木多枝子
鎌倉喜久恵
森 理和
井上 石動
齊藤 裕子
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保

森山のりこ
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
篠田 純子
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
山莊 慶子
松村美智子

ままごとの大人ことばで大根切る
ままごとの母役決り鳳仙花
ふきのたうきざんのおままごのごはん
ままごとのやうなおせちよ一人分
すかんぼや遠き思ひ出おままごと
ままごとの菜に香るや金木犀

真水

飛魚に太きホースの真水掛く
六月や真水といへばコンビニへ
沖繩慰霊日海中深くある真水
八月や自動販賣機の真水

真向ひ

雲の峯羊蹄山を真向かひに

豆電球

亀鳴くやたたいて点す豆電球
露草の豆電球が昼灯す
豆電球飛び込んでしまふ秋の蚊
豆電球の下にありても枇杷匂ふ

守る

寒菊は小さく開き身を守る
白木蓮主亡き庭守ること
荒れ庭を守りてカンナ盛んなり
縄文の貝塚守る冬木立

齊藤 静枝
森山のりこ
須賀 敏子
木村茂登子
山莊 慶子
秋川 泉

佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
芝宮須磨子
佐藤 恭子
長崎 桂子
佐藤 恭子
定梶 じょう
鎌倉喜久恵
須賀 敏子
鎌倉喜久恵
早崎 泰江

一塁を守り切つたり草いきれ
秋高し東京守る送電線
句碑守る光悦垣やしだれ梅

ななかまど山小屋守る三代目
かたくなに生きて墓守る露の寺
夏木立破壊から身を守りをり
名月やユリノキ守る術ください
穂高も秋辻々守る道祖神
通学路見守る人の冬帽子
春一番普通の暮し守りたし
一茶忌や痩せ犬月のスラム守る
アブ・シンベル砂は守りの防腐剤
海女潜る見守る夫の目の優し
山百合の木陰孤高を守り咲く
先生の白鳥見守る鴨達を
通学路見守る人や春帽子
春の鳶灯台守るごとく舞ふ
老人は御神酒所守り秋祭
さんさんと居場所守りて冬の星
床の間の弘子夜長を守りをり
雪道に合格祈願の守り札
春光や母の見守る一輪車
電線に巢立見守る親鴉

篠田 純子
東 亜 未
森山のりこ
森山のりこ
渡邊 友七
長崎 桂子
東 亜 未
森山のりこ
早崎 泰江
須賀 敏子
渡邊 友七
森 理和
森山のりこ
渡邊 友七
芝 尚子
早崎 泰江
早崎 泰江
芝宮須磨子
遠藤 実
東 亜 未
篠田 純子
赤座 典子
大日向幸江

土牢を守る走り根花すみれ
涼しさや常葉樹の守る西念寺
村守るお地蔵さんの更衣
行き交ひを見守り癒す野菊かな
大花野守る術なし低気圧
巢作りを終へて見守る日の盛
ギイーギヤーと守る尾長や茂りに巢
ウミガメの孵化守るテント秋の雨
寒の水妻の言ひつけよく守り
春空にロケット間直ぐ国守る

守り札

雪道に合格祈願の守り札

摩耶

摩耶夫人もマリアも貞女鏡餅

眉

眉寄せてウイルスを吐く仏法僧
棚経や楽になつたと母の眉
眉描けば春のしぐれの音背より
唐がらし優しい眉に描き直す
風寒しビルの上なる眉の月
朝寒しぎざぎさに眉描き上がる
長寿眉と言はれその気に万愚節
男郎花心底のごと眉を引き

篠田 純子
井上 石動
大日向幸江
長崎 桂子
長崎 桂子
赤座 典子
七郎衛門吉保
篠田 純子
佐藤 喜孝
長崎 桂子
篠田 純子
篠田 純子
松村美智子
篠田 純子
田中 藤穂
篠田 純子
須賀 敏子
篠田 純子
堀内 一郎
佐藤 喜孝

陣痛の眉阿修羅なりそぞろ寒
寒九の帽眉毛を消してしまひけり
吸入に眉毛を濡らし姉妹なる
消防車見せる子守に眉の月
北風や自転車の子児眉八の字

真夜

真夜中の用水桶の子子たち
春寒しコンビニは真夜灯りをり
看護手厚し弥生の真夜の再入院
真夜中に布団被りてほくそ笑む
真夜中や思考のやうな冬の月
真夜中の国旗と国歌虫すだく
出来不出来介護のしぐさ真夜の秋
ねむる間に葉月の過ぎる真夜の月
冬の真夜宇宙と結ぶ生中継
夏の真夜なつかしき歌ラジオより
真夜中も青空はあり薔薇青し
風邪こちぎらつく真夜のブラウン管
真夜中に遠雷の過ぐ夜汽車めく
真夜の月猫の寝息が耳につく
真夜中のコンビニへ行く雪女郎

真横

水槽を真横に鯉の朱き腹

篠田 純子
東 亜 未
竹内 弘子
森 理和
斉藤 裕子

竹内 弘子
田中 藤穂
松本 米子
篠田 大佳
早崎 泰江
須賀 敏子
堀内 一郎
渡邊 友七
田中 藤穂
芝宮 須磨子
鎌倉 喜久恵
佐藤 喜孝
赤座 典子
佐藤 恭子
須賀 敏子
赤座 典子

マヨネーズ 春愁にかけてしまふ
マヨネーズ まとひて元氣冬野菜

矢

風邪に寝て日矢のほこりと遊びけり
矢印のとほりに生きて星祭
春一番きらりと光るダーツの矢
花だより日文矢文で北上す
緑陰に的を外れし矢をさがす
思ひ立つ金魚の一尾矢のごとく
御降りや的を掠める白羽の矢
春の宵矢印たどる「ねねの道」
笹鳴の奥は縞なす日矢すだれ
矢絰に藤の織り成す杉の山
秋泉や稽古の叱咤矢継ぎばや
矢印となりて立ちをる暮の通夜
西日の矢放射線の矢は見えず
矢の如く跳び出す雀春立つ日
矢のやうに過ぎし女子会夜半の春
あめつちを截つや一の矢初稽古
うす霞日矢一条の大菩薩
放ちたる一矢秋の気裂きにけり
角々の矢印どほり花見山

佐藤 喜孝
鎌倉 喜久恵

渡邊 友七
篠田 純子
森山のりこ
木村 茂登子
芝 尚子
森 理和
須賀 敏子
東 亜 未
渡邊 友七
森 理和
東 亜 未
東 亜 未
木村 茂登子
篠田 純子
赤座 典子
井上 石動
井上 石動
井上 石動
篠田 純子

駅ロータリー尾長の群に光の矢

刃

梅雨寒や齡と刃暴走す

夜陰

蛞蝓や夜陰にまぎれ銀の道

夜雨

しばしばの夜雨朝顔のぼり咲く

八重

八重の遠にいくさ近くのやへざくら

荔枝系瓜朝顔胡瓜窓に八重

鳥の声包むで八重の咲き誇り

佇まふ八重垣姫に春の鳶

八百屋

極月や花屋八百屋の移転せる

店先に水仙を置く八百屋かな

白菜の良し悪しはかる八百屋の灯

南無八百屋お七の墓の白あぢさゐ

店先で八百屋の欠伸寒雀

春ささず八百屋の旦那役者顔

駅中の八百屋で探す十全茄子

やをら

床の間に蛸梅やをら羽搏ける

野外

大日向幸江

七郎衛門吉保

早崎 泰江

渡邊 友七

佐藤 恭子

東 亜 未

鎌倉 喜久恵

赤座 典子

松村 美智子

鎌倉 喜久恵

芝宮 須磨子

芝 尚子

赤座 典子

篠田 純子

赤座 典子

赤座 典子

野外劇場石のベンチに散紅葉

ひぐらしに急かされ野外映画会

アイーダ哭く野外劇場夏の月

野外ステージ地下アイドルへ秋日さす

夜学

昼間より明るき区画夜学校

夜学いま教室一つ消燈す

夜学の灯いま華やいで放課かな

夜学生平行棒の夜と昼

屋形船

屋形船蚊のふうはりと腕を刺す

涼風と鱸のてんぷら屋形船

夏の月全速力の屋形船

荷風の忌見下ろしてゐる屋形船

薬缶

酉の市大きな薬缶股にして

丁寧な薬缶を磨く春日和

ふるさとの薬缶鳴りをり寒紅梅

鍋薬缶瓦斯台磨く心太

冬黄葉薬缶ちりちりカフエ静か

夜気

桃咲いて黄泉平坂夜気そより

路地裏の夜気の甘みや春隣

齊藤 裕子

秋川 泉

森 なほ子

篠田 純子

長崎 桂子

定梶じょう

定梶じょう

七郎衛門吉保

東 亜 未

芝 尚子

佐藤 喜孝

田中 藤穂

鈴木 多枝子

須賀 敏子

吉成 美代子

森 理和

森 理和

田中 藤穂

田中 藤穂

田中 藤穂

あとがき

編集ミス

三月号につづき四月号に原稿扱ひにミス、後漢書のほどよろしく。

下石神井日録

今月はお休みします。

短文「私の歳時記」の願ひ

歳時記は句会用、吟行用、普段使ひ、電子辞書、ネット、ここぞとおもふ時使ふ大判歳時記と様々です。皆様はどのような歳時記をどう使ひ分けてをられるか関心があります。皆様の参加期待してます。

私の机辺にある歳時記は岩波文庫の『増補俳諧歳時記草稿』です。ほかの歳時記はまだ引つ越しの段ボール箱に入ってます。この歳時記にはちょっとしたエピソードがある方にお薦めの歳時記はと訊かれたことがあります。

書家の方でしたからこの歳時記が面白いと思ひました。後日あんな高価な本すめやがってと笑つてゐました。岩波文庫といふのを忘れてゐたことに気が付きました。明治期に出版されたこの本の価格はいくらか聞き忘れました。私も所持してゐるのだが忙しく探す時間はない。机辺にあるものは勿論岩波文庫の「曲亭馬琴編・蘭亭青蘭穂・堀切実校注版」です。

(喜孝)

二〇二二年五月号

発行日 五月二十一日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
電話 090 9828 4244
印刷・製本・レイアウト サンハイツ石神井2 一階

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ 竹僊房
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)